日本人も知らない日本語の一面*

トーマス・グロース

Abstract

A Japanese person does not have to learn Japanese the way foreigners have to do. The bonus of acquiring a natural language is that you do not have to know its workings and mechanisms in order to use it properly. The downside, however, is that you may also never know how your mother tongue operates.

In this paper, I describe how Japanese operates at the morphological level. Morphology is to language what biochemistry is to the human body. The way how cells operate in order to perform their functions is intricate and wonderful beyond belief. Languages offer us an insight into their beauty in a similar way. The Japanese morphology is an extraordinarily flexible system where morphological categories and rules that operate on these categories work together to produce a rich and deep way of communicating. I believe that it is a pity that most Japanese do not know this side of their mother tongue, and I hope this paper alleviates the situation somewhat.

1．問題点

日本人が日本語を話すのは当然なことである。幼児のときから身につけてきているので，日本語の様々なメカニズムを意識しなくても正しい日本語が話せる。そこまでは問題ではない。しかし，大学に入学して外国語を習おうとするなら，自分の母語について，せめて基本的な知識を手に入れるべきである。

筆者自身が何回も経験したのは，日本人，特に大学生が日本語を完璧に話せるのに，日本語がどういうふうに機能しているのか殆ど知らないことである。ごく簡単な例を言うと，「日本語には格助詞がどのぐらいあるか？」，そして「日本語には品詞はどのぐらいあるか？」

* 塩山正純先生には全文に目を通していただき，日本語の表現を中心に適切にコメントをいただいた。ここに記して感謝にかえたい。

のような質問に誰も答えられない。無論，それは大学生のせいではない。むしろ日本の国語教育制度のせいであると言える。

本稿では，日本語の形態論の働き方を紹介したい。日本人がよく習う西洋言語の，英語・ドイツ語・フランス語，そして中国語の形態とは全く違っているのである。西洋言語にとって適切な概念を利用しながら日本語の機能を記述することがよくあるが，西洋言語と日本語は違っているので，それでは適切に記述することにならない。言い換えれば，日本語の魅力は西洋言語の概念を利用し説明しようとしても，ハッキリとならない。個人的に言えば，筆者は，日本語の形態論を魅力的に思っている。日本人にその感覚が殆どないことを残念に思っている。

2．形態論とは

自然言語は世界にあるものや事柄についての情報を伝える道具である。自然言語には2種類あり，「音声」を元に情報を伝える言語と，「合図」でコミュニケーションする言語がある。前者は「音声言語」，後者は「信号言語・合図言語」として知られている。例えば，手話は合図言語である。しかし，殆どすべての自然言語は音声言語であるので，ここでは音声言語に着目していきたい。

音声言語では，「音」が中心となっている。言語学者は「素音 phone」と「音素 phoneme」を区別している。素音というのは，実際に感覚を通して知覚できる。例えば，相手の話を録音したら，録音したところは「素音」から成り立っている。一方，音素は感覚を通して知覚できない。音素というのは，素音の抽象的な概念である。例を挙げると，「お酢」の最後の音は「します」の最後の音とかなり違っており，2つの素音であるが，音素は1つしかない。2つ以上の素音から音素を定義するには，様々な厳しい条件がある。

音声言語が音素から成り立っているとしたら，深刻な問題が発生する。音素の数がどんなに多くても，世界にはその数よりものや事柄が多い。そのため，1つだけの音素をものや事柄の表示に使うのは無理である。その問題を解決するために，自然言語は重要なコツを発明した。自然言語は2つ以上の音素を組み合わせながら，ものや事柄の表示を作り出した。日本語の一番簡単な例は，「e」と「i」であろう:「e」を「i」の後にすると「いえ」となり，意味は｛家｝であるが，順序を逆にすると，「えい」となり，意味は｛栄・頴・嬰｝などとなる。結果として，様々な音素を様々な順序に組み合わせて様々な表示が作り出せるということである。「音声学」という分野では，素音の物理学・生理学的な特徴を調べ，「音韻学」という分野では，ある自然言語の音素の可能な組み合わせを調べて，音素を分類する。

どの自然言語でも，ちょうど1つの音素からできたことばは少ない。一方，2つ以上の音素からできたことばが圧倒的に多い。しかし，すぐに「音素」という概念から「ことば」と

いう概念に飛んではいけない。例えば，「家」と「家探し」というのはいずれも「ことば」であるが，何かが違っているのである。前者は1つの意味を表しているが，後者は複合の意味を表している。つまり，後者では，{家} の単一の意味と {探し} の単一の意味が複合している。

「形態論」というのも，言語学の1つの分野のである。形態論では，音素から成り立っている連鎖をその意味によって分析し，単一の意味の音素連鎖を調べる。単一の意味の音素連鎖というのを「形態素 morpheme」と呼ぶ。よって，［家］はちょうど1つの形態素であるが，「家探し」は少なくとも2つの形態素から成り立っている[1)]。

形態論にとっては，「意味」という概念が重要である。しかし，「意味」の意味はかなり広い。ものや事柄の表示というのは，当然「意味」という概念に含まれているが，ものや事柄の表示に成れない「意味」もある。例えば，「食べた」の音素連鎖は2つの意味を表している。1つは {食べる} で，もう1つは {過去} である。その理由として，「食べた」は2つの形態素から成り立っており，［食べ］というのは {食べる} の意味で，［た］は {過去} の意味である。後者の意味は「文法的意味」とも言われる。一方，前者の意味は「語彙的意味」と言われる。

形態論では，その2つの意味を元に，2つの形態素のタイプに分類される。語彙的意味を表す形態素は「自由形態素 free morpheme」，文法的意味を表す形態素は「拘束形態素 bound morpheme」と言われる。例を挙げると，「食べた」の［た］というのは，文法的意味 {過去} をもっているので，拘束形態素と見なす。一方，［過去］という形態素は，語彙的意味 {過去} をもっているので，自由形態素を見なす。

普通，語彙的意味を表す形態素は自由に出るが，それぞれの自然言語には様々な例外もあるので，細かく調べなければならない。一方，文法的意味を表す形態素は殆ど自由に出られないので，殆ど拘束形態素であるが，そこにも例外がある。

殆どどの自然言語にも，同じ意味をもつが，形が違う音素連鎖がある。例を挙げると，日本語の動詞「書く」・「食べる」・「来る」はそれぞれ2つの形態素から成り立っている。「書く」は {書く} と {現在}，「食べる」は {食べる} と {現在}，「来る」は {来る} と {現在} から成り立っている。しかし，{現在} という文法的意味を表す形態素はいったい何であろう？　共通するところといったら，最後の母音［ウ］ではないか？　もし，それぞれの動詞に，全く同じ形態素がついていれば，形も同じでなければならない。しかし，最後の［ウ］を形態素にすれば，「食べる」の語幹は［taber］，「来る」の語幹は［kur］となる。それはありえないようである。一方，［ル］を {現在} の形態素にすれば，「書く」に当てはまらない。「書く」には「r」の音素がないのである。従って，同じ {現在} の意味をもち形が違う形態

1）これから次の表示慣例を使用する：［形態素］・{形態素の意味}・「他の表現」。

素が存在すると考えざるをえない。

言語学者は，そういう形態素を「異形 allomorph」と呼んでいる。「異形」という概念を理解するには，2つの概念を理解しなければならない。それは「分布 distribution」と「相補分布 complementary distribution」という概念である。

音素と同様に，形態素も連鎖を作る。上に紹介した「家探し」というのは形態素［家］と形態素［探し］から成り立っている連鎖であった。形態素［家］を「M1」，形態素［探し］を「M2」としよう。そうすると，M1はM2の「分布」となり，M2はM1の「分布」となる。M1の分布を決めるために，M2を適切に選択すれば，M1の特性が決まる。

一方，「相補分布」というのは，分布の特別なケースである。同じ意味の形態素は，全く同じ分布が当てはまらなければ，「相補分布」が当てはまるという概念である。上記の例に戻ると，「書く」・「食べる」・「来る」のそれぞれの｛現在｝を表す形態素は相補分布にある。動詞の語幹は子音で終われば，「ウ」をつけるが，語幹は母音で終われば，「ル」をつける。不規則動詞なら，「ウル」をつける。「ウ」が出られる分布には，「ル」も「ウル」も出られないし，「ル」が出られる分布には，「ウ」も「ウル」も出られない。そして，「ウル」が出られる分布には「ウ」も「ル」も出られない。それを「相補分布」と言う。動詞の現在形の異形とその相補分布を図①のようにまとめる。

動詞	ウ	ル	ウル
「書く」	kak.u	* kak.ru	* kak.uru
「食べる」	* tabe.u	tabe.ru	* tabe.uru
「来る」	* k.u	* k.ru	k.uru

図①：日本語の動詞の現在形の異形

言語学者は「*」の記号で不可能な表現を指摘する。形態論学者は，「.」の記号を利用して形態素と形態素の間の区切りを指摘する。

現在形「ウ」・「ル」・「ウル」は同じ形態素の異形であることが明らかになっている。言語学者は，この場合に「大音素 archiphoneme」を利用する。大音素はいつも大文字で書かれる。そうすると，日本語の動詞の現在形は［Ru］で，その異形は「u・r・uru」となる。

日本語は漢字かな混じり文で書かれるが，日常生活ではそれでよくても，日本語を言語学的に分析しようとする場合には，適切ではない。なぜなら，「文字」というのは，自然言語の単位ではないのである。仮名では，母音と子音を複合して表すので，ちょうど母音と子音の間に形態素の区切りがある場合には，仮名を利用して明確にすることができない。言語学のどの分野でも，音素単位を元にして現象を描くのが適切だと考えられている。ローマ字は音素単位なので，それを利用すべきである。ローマ字が1つもない日本語についての本や論文は言語学にふさわしい基準を満たさないから，大きな疑問をもって読むべきである。

従って，形態論には2つの重要な課題がある。まず，どの音素連鎖が形態素であるかを確認することである。その後，形態素の内から，どれが自由形態素か拘束形態素かを調べることである。拘束形態素を体系化したあと，「形態統合論」を立てることができる。自由形態素が判別できれば，「品詞」を分類できる。

3．日本語の品詞

形態素という概念は意味という概念に定義されていても，「品詞」を決めることには，意味という概念はあまり役に立たない。つまり，「品詞」というのは，例えば，すべての植物を意味する形態素をまとめるのではない。すべての植物の形態素を1つの範疇にまとめる仕事は無理であるとは言えないが，形態論の仕事ではなく，意味論の仕事なのである。「品詞」を形態論的に定義しようとすれば，同じ分布が当てはまる形態素に制限しなければならない。そこで，「品詞」をそう定義しよう。

（品詞）　＝　同じ分布が当てはまる形態素の集合

実際の例を見てみよう。「名詞」というのは，品詞の分類の1つである。どの自然言語にも名詞があるが，自然言語によって，分布が違っている。日本語の名詞は，どうしても格助詞［が］，［を］と一緒に出ることが可能でなければならない。よって，［が］と［を］は日本語の名詞の分布となる。「家が～」とも「家を～」とも言えれば，形態素［家］は「名詞」である。日本語の名詞という形態素は下記の分布に当てはまる。

（名詞）　＿＿＿［が］・［を］

上記の定義と同様に分布が明確にされている場合には，言語学者はその分布を「パラディグマ paradigma」と名づける。

こういう方法を利用すると，日本語の品詞を明確にできる。まず，品詞の数であるが，日本語には品詞は7つある。その品詞は用言の「動詞」・「形容動詞」と体言の「名詞」・「形容名詞」・「副詞」・「連体詞」・「間投詞」である。上に名詞の定義を記したので，これから残りの品詞を定義しよう。

日本語の動詞は現在形と過去形の語尾と一緒に出られなければならない。現在形の形態素に異形があることは上で説明した。過去形の形態素にも異形「ta・da」があるので，過去形の形態素は［Ta］となる。従って，動詞のパラディグマはこうなる。

（動詞）　＿＿＿［Ru］・［Ta］

この定義によると，「書く」・「食べる」・「来る」はすべて動詞である。しかし，1つの品詞

という範疇には，さらに「下位範疇」がありうる。例えば，「書く」は「子音性の動詞 Vc」で，「食べる」は「母音性の動詞 Vv」である。一方，「来る」は「不規則的動詞 Vu」である。

Vv には，さらに下位範疇が 2 つある。語幹が「i」で終わる動詞（見る：mi.ru）と，「e」で終わる動詞（食べる：tabe.ru）がある。「a・o・u」で終わる Vv は存在しない。

Vc は語幹が子音で終わる動詞であり，6 つの下位範疇がある。

1．「s」に終わる動詞（貸す：kas.u）
2．「t」か「r」に終わる動詞（勝つ：kat.u, 刈る：kar.u）
3．「w」に終わる動詞（買う：kaw.u）
4．「k」に終わる動詞（書く：kak.u）
5．「g」に終わる動詞（嗅ぐ：kag.u）
6．「b」か「m」か「n」に終わる動詞（呼ぶ：yob.u, 読む：yom.u, 死ぬ：sin.u）

Vu には下位範疇が 3 つある。完全な不規則的動詞は「来る Vu11」・「する Vu12」・「ございます Vu13」そして「ます Vu13」で終わる動詞である。第 2 下位範疇は Vc に似ている動詞を含む。それは，「ar」に終わる動詞（いらっしゃる：irassyar.u, おっしゃる：ossyar.u, 下さる：kudasar.u, なさる：nasar.u Vu21）と「いく・ゆく Vu22」である。第 3 下位範疇は Vv に似ている動詞を含む。それは，「ありうる・なりうる」のように「うる Vu3」をうけられる動詞である。

図②～④は動詞の下位範疇をまとめたものである。

母音性の動詞（Vv）	
見る：mi.ru	食べる：tabe.ru

図②：日本語の母音性の動詞の下位範疇

子音性の動詞（Vc）		
貸す：kas.u	勝つ：kat.u 刈る：kar.u	買う：kaw.u
書く：kak.u	嗅ぐ：kag.u	呼ぶ：yob.u 読む：yom.u 死ぬ：sin.u

図③：日本語の子音性の動詞の下位範疇

不規則的動詞（Vu）		
来る：k.uru する：s.uru ございます：gozaimas.u ～ます：-mas.u	いらっしゃる：irassyar.u おっしゃる：ossyar.u 下さる：kudasar.u なさる：nasar.u	～うる：-E.ru[2]

図④：日本語の不規則的動詞の下位範疇

2）大音素付形態素である。異形は「e.ru」と「.uru」である。

Vc と Vu の第 1 下位範疇の動詞には，常に「語幹」と「基本形」があり，その動詞形態素の異形である。基本形は語幹＋母音「i」の形を取る。Vu の第 2 下位範疇では，基本形は語幹－子音「r」＋母音「i」の形を取る。

動詞以外には，もう 1 つの用言がある。日本語には形容詞が二種類あるが，1 つは用言で，もう 1 つは体言である。国語の学校文法では，用言の形容詞を「形容詞」，体言の形容詞を「形容動詞」と呼ぶ。この名称は適切ではない。「動詞」という概念は，体言の形容詞に決して当てはまらないので，むしろ用言の形容詞を「形容動詞」とし，体言の形容詞を「形容名詞」にするのが合理的であろう。以下，本稿では，そういうことば使いにする。

形容動詞は動詞と同様に語尾をうける。ある形態素は日本語の形容動詞であれば，必ず［i］と［ku］の分布になければならない。例を挙げると，「あつい」と「あつく」であろう。

（形容動詞）　＿＿＿［i］・［ku］

形容動詞にも，様々な下位範疇がある。

1．形容動詞の語幹は名詞の定義に当てはまる（色形容動詞：赤い：aka.i → 赤：aka など）。
2．形容動詞の語幹は形容名詞の定義に当てはまる（暖かい：atataka.i → 暖かな：atataka=na など）。
3．形容動詞の語幹は助詞「の」をうけられ，修飾形容詞となれる（めでたい：medeta.i → めでたの：medeta=no）。
4．形容動詞の語幹は助詞「な」をうけられ，修飾形容詞となれる（大きい：ooki.i → 大きな：ooki=na）。
5．形容動詞の語幹は語尾も助詞もつけずに間投詞的発言となれる（寒い：samu.i → 寒！：samu!）。
6．最後の下位範疇は残りの形容動詞を含む。

図⑤は，形容動詞の下位範疇をまとめたものである。

体言は名詞・形容名詞・副詞・連体詞・間投詞である。体言の品詞は語尾をうけられない。さきに，名詞の品詞は上で定義を紹介したが，ここで名詞の下位範疇を紹介する。

	A=N	A=K	A=no	A=na	A!	例
A1	＋	－				赤い
A2	－	＋				暖かい
A3	－	－	＋			めでたい
A4	－	－	－	＋		大きい
A5	－	－	－	－	＋	寒い
A6	－	－	－	－	－	古い

図⑤：日本語の形容動詞の下位範疇

名詞的下位範疇は5つある。

1．形容名詞的名詞 (Nk)：修飾名詞として，助詞「な」をうけられる名詞 (安全・元気・様・風　など) である。

2．動詞的名詞 (Nv)：動詞「する」と複合表現を作れる名詞 (失敗する　など) である。

3．指示的名詞：[こいつ]・[それ]・[あそこ・あちら・あっち]・[どこ] などである。

4．数字名詞 (Nz)：[いち・に・さん]・[ひとつ・ふたつ・みっつ] などである。

5．残りの名詞はこの下位範疇に含まれる。

「形容名詞」は，「助詞」をうけることができる。修飾形容名詞は助詞［な］を，連用形容名詞は助詞［に］をうける。

(形容名詞)　_____[な]・[に]

形容名詞には，3つの大きな下位範疇がある。

1．修飾形容名詞は助詞［な］だけをうける。

2．修飾形容名詞は助詞［な］も［の］もうけられ，その意味は同じである。

3．修飾形容名詞は助詞［な］も［の］もうけられ，その意味は違っている。

それぞれの下位範疇は，さらに2つの下位範疇に分けられる。1つは，［さ］をうけられ，もう1つは，［さ］をうけられない。図⑥は形容名詞の下位範疇をまとめたもので，あわせて例も挙げる。

形容名詞(K)	[な]だけ	[な]＝[の]	[な]≠[の]	[さ]	例
K11	＋	－	－	＋	穏やか
K12	＋	－	－	－	めった
K21	－	＋	－	＋	普通
K22	－	＋	－	－	生憎
K31	－	－	＋	＋	便利
K32	－	－	＋	－	無理

図⑥：日本語の形容名詞の下位範疇

「副詞」は定義しにくい品詞である。日本語の副詞は3つのタイプがある。

1．副詞は助詞［と］をうけるか，「っと」か「んと」で終わる。

2．副詞は助詞［に］をうけるか，「に」で終わる。

3．このタイプの副詞は助詞をうけず，「と」にも「に」でも終わらないが，主に用言のことばを修飾する。

そのためには，動詞や名詞のように一般化した品詞定義がしにくい。

(副詞)　　_____[と] / 「っと・んと」 / [に] / 「に」 /　用言

これに従って，下位範疇を紹介する。第1下位範疇には，さらにいくつかの下位範疇がある。一般的に言えば，上記のタイプ1である。タイプ1.1は，例えば「きっと」と「ちゃんと」など「っと」か「んと」で終わる副詞である。タイプ1.2は「然」で終わる副詞で，助詞[と]が必要なタイプである。例は「漠然」などである。タイプ1.3はさらに3つの下位範疇を含む。タイプ1.3.1は「重複副詞」で，例は[ぶらぶら]などである。タイプ1.3.2は語幹が「り」に終わる副詞で，例は[はっきり]などである。タイプ1.3.3はこれ以外の副詞で，例えば[あくせく]である。

第2下位範疇は3つのタイプがあり，すべては上記のタイプ2なので，助詞[に]をうけるか，「に」で終わる副詞である。タイプ2.1は「に」で終わる副詞で，例は[特に]・[既に]などである。タイプ2.2は助詞[に]をうけなければならない副詞であるが，名詞を修飾するときには助詞[の]または「たる」をうけることもできる。例は[たま]・[同時]などである。タイプ2.3は普通に助詞[に]をうける副詞である。例は[せっかく]・[たちまち]などである。

第3下位範疇は2つのタイプがある。タイプ3.1は[こう・そう・ああ・どう]である。タイプ3.2は様々な副詞を含んでいる。特に多いのは元々2つの形態素からできた副詞と動詞から派生した副詞である。前者の例は[最も](<副詞[もっと]+助詞[も]),[どうぞ](<副詞[どう]+助詞[ぞ])などであり，後者の例は[初めて](<動詞[hazime]+語尾[Te]),[例えば](<動詞[tatof]+語尾[Reba])などである。他の例は[なお]・[もし]・[結局]などである。

図⑦～⑨は副詞の下位範疇をまとめたものである。

M1.1	「っと・んと」	はっと・きちんと
M1.2	助詞[と]	整然
M1.3.1	重複	ニコニコ
M1.3.2	「り」	あっさり
M1.3.3	残り	あくせく

図⑦：日本語の副詞の第①下位範疇

M2.1	「に」	まさに
M2.2	助詞[に]必要	とも
M2.3	助詞[に]普通	さすが

図⑧：日本語の副詞の第②下位範疇

M3.1	指示副詞	こう・そう・ああ・どう
M3.2	残り	なぜ・あるいわ・かえって

図⑨：日本語の副詞の第③下位範疇

「連体詞」の品詞は名詞の前に出る形態素を含む。一般的に注意を払うべきは，連体詞が「冠詞」と違っていることである。日本語には冠詞がない。冠詞を持っている言語では，冠詞は本来的に「性」という概念を表す形態素である。連体詞はその仕事が果たせない。連体詞の品詞定義は簡単である。連体詞は他の拘束形態素（助詞や語尾など）をうけずに名詞の前に出たとき，その名詞に直接依存している形態素である。

（連体詞）　＿＿＿名詞

連体詞は4つの下位範疇がある。第1下位範疇は指示的連体詞を含む。それは［この・その・あの・どの］と［こんな・そんな・あんな・どんな］である。第2下位範疇は動詞から派生した連体詞を含み，3つのタイプがある。タイプ2.1は動詞の基本形から派生した連体詞である。例は［および］・［改めて］などである。タイプ2.2は過去形にした動詞から派生した連体詞を含む。例は［大した］などである。タイプ2.3は古語の動詞から派生した連体詞である。例は［ある］（＜動詞［ar］＋語尾［URu］），［あらゆる］（＜動詞［ar］＋接尾辞［Ayu］＋語尾［URu］），［聖なる］（＜［sei］＋動詞的助詞［nar］＋語尾［URu］），［数ならぬ］（＜名詞［kazu］＋動詞的助詞［nar］＋接尾辞［An］＋語尾［URu］），［無理からぬ］（＜形容名詞［muri］＋接尾辞［kar］＋接尾辞［An］＋語尾［URu］）である。第3下位範疇は接頭辞的連体詞を含み，殆ど和語を含まない。これには3つのタイプがある。タイプ3.1は時の接頭辞的連体詞で，例は［今］・［昨］・［翌］などである。タイプ3.2は指示接頭辞的連体詞で，例は［本］・［当］・［同］・［該］である。タイプ3.3はそれ以外の接頭辞的連体詞で，例は［新］・［旧］などである。第4下位範疇は残りの連体詞で，例は［我が］・［約］・［かの］などである。

D1	指示的	この・そんな　など
D2	動詞派生	ある・いわゆる　など
D3	接頭辞的	明後・翌々　など
D4	残り	いろんな・国際　など

図⑩：日本語の連体詞の下位範疇

さらに，「間投詞」という品詞もある。間投詞は自ら発言を作るものである。他のことばとともに出たら，助詞［と］または［って］がついている。例は［はい］・［いいえ］・［ほら］・［よいしょ］などである。

特に注目しなければならないのは，日本語にない品詞である。それは，「代名詞」と「接続詞」である。日本語の代名詞は，西洋言語の代名詞と比較すれば，完全な代名詞と見なせな

い。例えば，英語では，代名詞と冠詞はいっさい一緒に句を作れない。英語の「this I」とは言えないが，日本語では「この私」と言える。他の西洋言語も同様である。日本語には接続詞の分類もない。西洋言語の接続詞が果たす役割は，日本語の語尾や助詞そして副詞が受け持っている。

日本語に代名詞，接続詞がないことは，乏しいというわけではなく，日本語では代名詞と接続詞の品詞を設けずに，それらの機能が全く違ったままで生かされるのである。従って，西洋言語の難しい代名詞結合と並列関係は，日本語では簡単に表現できる。

4．日本語の接辞体系

自然言語の品詞を決めるとともに，形態論の大きな課題が解決したが，まだもう1つの重要な課題が残っている。品詞を分類した際，殆どの自由形態素を品詞に割り当てた。しかし，拘束形態素の分類はまだ行っていない。自由形態素の品詞性は，様々な自然言語を通じて同様となる。当然例外もあるが，主に日本語の名詞になる形態素は，ドイツ語や英語などで名詞になる形態素と同じである。日本語の［家］は，ドイツ語の［Haus］と英語の［house］と同様に名詞である。拘束形態素は殆ど文法的意味を表しているので，自然言語によってかなり異なった形を取ることが多い。そのため，自然言語の相違は品詞分類より，拘束形態素の体系から分かる。まず，把握しなければならないのは，ある自然言語がどのように文法的な情報を処理するかということである。言語学者は，4つのタイプを区別する。

1．ある言語は文法的意味を表す形態素を自由形態素と同様に扱う。そういう言語を「孤立言語」と言われ，その例の1つは中国語である。
2．ある言語は文法的意味を表す形態素を1つのことばにまとめる。そういう言語を「抱合言語」と言われる。1つの例はエスキモー言語である。
3．ある言語は文法的意味を表す形態素を自由形態素と結びつけて，ときに大きな変化を起こす。そういう言語を「屈折言語」と言われる。例は，ドイツ語とフランス語である。
4．ある言語は文法的意味を表す形態素を，殆ど変化を起こさずに，自由形態素と結びつける。そういう言語を「膠着言語」と言われる。日本語・フィンランド語・ハンガリ語・トルコ語などは膠着言語である。

ところで，英語は元々屈折言語であったが，孤立言語になりつつある。

日本語が膠着言語であるということには，2つの重要な問題があるのである。1つは，日本語では，自由形態素と拘束形態素の区別が明確なことである。以下，自由形態素を「語彙素 lexeme」と言い換え，拘束形態素を「接辞 affix」と言い換える。接辞は自由に「語」を作れないものである。もう1つは，接辞を語彙素と結びつければ，変化が少ないことである。例えば，接辞［Ru］を動詞的語彙素と結びつければ，語彙素の音素的構造は殆ど変わらない。

日本語の接辞体系はどうなっているのか？　どの接辞があるのか？　という問題について考えてみよう。接辞という概念をもう少し明確にすると，ある接辞を語彙素の前につけられるか，後につけられるかによって，「接頭辞 prefix」と「接尾辞 suffix」と区別しよう。接頭辞は語彙素の前につけ，接尾辞は語彙素の後につけるわけである。ある言語には，2つの語彙素の間に置ける接辞もあり，それを「接中辞 infix」と言う。1つの語彙素を囲む接辞をもつ言語もある。そういう接辞を「非連続形態素 circumfix」と言う。

日本語には，接頭辞も接尾辞もある。[go-]・[o-] は接頭辞で，「ご親切：go.sinsetu」や「お願い：o.negai」のように，語彙素の前に出る。一方，「来た：ki. ta」や「母が：haha=ga」の [Ta] と [ga] は接尾辞で，語彙素の後に出る。

接尾辞をもう少し分類しよう。上記の [Ta] と [ga] は全く同様の接尾辞のタイプではない感じがする。なぜなら，[Ta] は [ga] の前に出なければならなくて，[ga] は [Ta] の前にいっさい出られないからである。下記の例を見てみよう。

(1)　来たが
(2) * 来がた

つまり，接尾辞という範疇のなかには，さらに下位範疇が存在しなければならないことが分かる。さらに次の例を見てみよう。

(3)　来ましたが
(4) * 来ましがた
(5) * 来たましが
(6) * 来たがまし
(7) * 来がました
(8) * 来がたまし

基本形 [ki] の後には，接尾辞が3つある。正しい順序は [mas[3)]] — [Ta[4)]] — [ga] である。例(4)〜(8)では，順序が乱れているので，正しくない。その順序は接尾辞の意味と全然関係なく，むしろ接尾辞の下位範疇による。例えば，次の例は，形態素の組み立てを見れば，(3)と同様の構造を取る。

(9)　来られてから

例(9)では，語幹 [k] の後にも接尾辞が3つある。それは [Rare[5)]] — [Te] — [kara] で

3）ここには，異形 [masi] が出ている。
4）ここには，異形 [ta] が出ている。
5）ここには，異形 [orare] が出ている。

ある。[mas] と [Rare]・[Ta] と [Te]・[ga] と [kara] はそれぞれ同じ下位範疇の接尾辞であることが明らかになっている。語彙素の後の接尾辞の順序は，接尾辞の意味によらず，接尾辞の範疇により生成されるらしい。

[ga] や [kara] などの接尾辞を以下「助詞」と言い，[Ta] や [Te] などの接尾辞を「語尾」と言う。[mas] や [Rare] などの接尾辞は以下も「接尾辞」と言う。狭い意味の接尾辞というものは，助詞と語尾の直後にいっさい出られない。語尾の直後に出られるものは，助詞である。そうすると，(3)と(9)で共通するのは，「形態素構造」である。この形態素構造は，「動詞－接尾辞－語尾－助詞」である。言語学者は，形態素構造を明確にするため，記号を使用する。「動詞」は「V」，接尾辞は「-s」，「語尾」は「+f」，「助詞」は「=p」で表わされる。従って，(3)と(9)の共通する形態素構造はこうなる。

(10)　V-s+f=p

しかし，まだ先がある。ここで，(1)と(3)を比較しよう。例(1)では，語尾 [Ta] は動詞の基本形 [ki] についている。語尾をうけるのは動詞と形容動詞しかないので，接尾辞 [-mas] は動詞的な形態素ではないかという問題が発生する。[-mas] は Vu（不規則的動詞）なので，語幹が基本形と違っている形態素であることを上で説明した。その理由は，接尾辞 [-mas] は「接尾動詞」でなかればならないということである。動詞につけられる接尾動詞は 2 種類あり，動詞の語幹につけるものと，動詞の基本形につけるものがある。図表⑪では日本語動詞につく接尾動詞を一覧にする。しかし，接尾動詞はいつも動詞についてくるわけではなく，形容動詞の語幹につける接尾動詞もある。「かる [-kar]」と「がる [-gar]」である。さらに，[-gar] は形容名詞の後にも出てくる。名詞の後には接尾動詞「めく [-mek]」と「ぶる [-bur]」も出てくる。

もし，接尾動詞をつければ，形容動詞・名詞・形容名詞の品詞が変わる。例えば，「怖がる」や「兄貴ぶる」や「嫌がる」などの表現はすべて動詞となっている。[-gar] と [-bur] は接尾動詞なので，「-v」の記号を使えばよい。そうすると，上記の動詞的表現の形態素構造は以下のようになる。

(11)	怖がる	kowa.gar.u	A-v+f	→ V'+f
(12)	兄貴ぶる	aniki.bur.u	N-v+f	→ V'+f
(13)	嫌がる	iya.gar.u	K-v+f	→ V'+f

(11)の語彙素は形容動詞であるが，語の品詞は形容動詞ではなく，動詞となっている。なぜなら，「怖がる」そのものは動詞「書く」と同様に動詞的なパラディグマに当てはまっているのである。この過程は「派生」として知られている。つまり，「怖がる」・「兄貴ぶる」・「嫌がる」はすべて「派生動詞 V'」である。

動詞の語幹につける接尾動詞			動詞の基本形につける接尾動詞		
接尾動詞	異形	文法的意味	接尾動詞	異形	文法的意味
-Rare.ru	-rare.ru -are.ru -orare.ru -erare.ru	受身	-mas.u		丁寧
-Re.ru	-re.ru -e.ru -ore.ru	可能	-yagar.u		軽蔑
-Sase.ru	-sase.ru -ase.ru -osase.ru	使役	-E.ru	-e.ru -.uru	可能
-Sas.u	-sas.u -as.u -osase.ru		-kane.ru		否定可能
-Asime.ru	-asime.ru -sime.ru -osime.ru -esime.ru		-tama.e		命令
-An.u	-an.u -n.u -on.u -en.u -en	否定			

図⑪：日本語動詞の語幹・基本形の接尾動詞[6)]

品詞のパラディグマに当てはまる接尾辞はそのパラディグマが定義する品詞への派生を起こすわけである。例えば，接尾動詞だけでなく，「接尾形容動詞」も存在している。日本語の動詞を否定形にすれば，その動詞を「派生形容動詞 A'」にしなければならない。文法的意味{否定}の接尾形容動詞は「ない［-Ana］」である。この接尾辞を動詞の語幹につける。また，動詞の基本形につける接尾形容動詞もあり，それは「たい［-ta］」である。

⒁　書かない　kak.ana.i　V-a+f　→ A'+f
⒂　書きたい　kaki.ta.i　V-a+f　→ A'+f

「書かない」も「書きたい」も「暑い」と同様に形容動詞のパラディグマに当てはまっているので，派生形容動詞である。

他の品詞の語彙素にも接尾形容動詞をつけられる。形容動詞の後につけられる最も生産的な接尾形容動詞は「っぽい［-ppo］」である。名詞にもつけることができる。他には，名詞につける「がましい［-gamasi］」もある。以下の図表⑫を参照されたい。

6）下線を付したところは実際の形態素とその異形である。［-Sas］・［-mas］・［yagar］は Vc で，［-An］と［-E］は Vu で，残りの接尾動詞は Vv である。

接尾形容動詞	つける品詞	異形	意味
-Ana.i	動詞（V）の語幹	-ana.i -na.i -ona.i -ina.i	否定
-ta.i	動詞（V）の基本形		希望
-ppo.i	形容動詞（A）・名詞（N）		何かに近い性質
-gamasi.i	名詞（N）		傾向

図⑫：日本語の接尾形容動詞

派生動詞をさらに派生形容動詞にしたり，派生形容動詞をさらに派生動詞にしたりできる。下記の例を見てみよう。

⑯　食べさせる　tabe.sase.ru　V-v+f　→ V'+f

「食べさせる」を過去形にすると，［-Ru］の変わりに［-Ta］をつける。もし，「食べさせる」を否定形にすると，次のようになる。

⑰　食べさせない　tabe.sase.na.i　V-v-a+f　→ A'+f

「食べさせる」は派生動詞であるが，「食べさせない」は派生形容動詞である。形容動詞なので，直接に動詞の過去形をつけられない。そのため，「食べさせない」をさらに動詞にしなければならない。この場合，接尾動詞［-kar］を使用できる。

⑱　食べさせなかった　tabe.sase.na.kat.ta　V-v-a-v+f　→ V'+f

こういう連続的派生は膠着言語の典型的な証である。トルク語にも似たような現象が証明できる。

日本語には，接尾名詞もたくさんある。動詞または派生動詞につけられる接尾名詞は「方」・「様」・「ぶり・っぷり」・「手」・「屋」・「っこ」である。形容動詞または派生形容動詞につけられる接尾名詞は「さ」・「み」・「め」で，「め」は形容名詞的名詞を派生する。「さ」も「み」も形容名詞につけることができる。

名詞または派生名詞につけられる接尾名詞の数は非常に多いので，下位範疇しか述べられない。

1．数詞につける接尾名詞「枚・分・台・月」などがある。数量を暗示する接尾名詞「目・半・余」もある。
2．人物の表現につける接尾名詞がある。その中には，複数を表す接尾名詞「等・達・供・方」がある。話しかけの接尾名詞「さん・さま・殿・君」もある。他には，人物名詞を派生する接尾名詞「家・人・員・者」などもある。

3．動作を表す接尾名詞がある。例は「化・視・製」などである。

4．空間的や時間的な関係を表す接尾名詞もある。例は「外・中・間」などである。

5．場所や時間を表す接尾名詞「所・時」などもある。

6．意味的に分類できない比較的大きな下位範疇で，例は，「系」・「性」・「機」などである。

副詞は接尾名詞「目」しかうけない。接尾名詞をうける連体詞は少ないが，意味的に名詞や形容動詞に似ている連体詞で，接尾名詞を受けることができるものである。例えば「国際人・国際語［D-n］」などである。間投詞は接尾辞をうけられない。接尾名詞がついている表現はすべて派生名詞となる。

接尾形容名詞もあるが，数が少ない。動詞または派生動詞につけられる接尾形容名詞は「そう」と「がち」である。「そう」は形容動詞にも形容名詞にもつける。形容動詞は「げ」もうける。名詞には「的」がよくついている。連体詞も「的」をうけるが，数は少ない。副詞と間投詞は接尾形容名詞をうけない。

接尾副詞も存在している。動詞には「つつ・つ・しな・がてら・がけ」をつける。名詞には「ぶり・来・後・上・下・がてら・だてら」をつけることができる。形容動詞・形容名詞・副詞・連体詞・間投詞は接尾副詞をうけられない。

接尾連体詞は1つしか存在しない。名詞に「対」をつけることができる。接尾間投詞は存在しない。

接頭辞も数が多い。意味的分類として，次のような下位範疇がある。

1．数字的接頭辞がある。

2．総合接頭辞「各・総・全・毎・諸」がある。

3．敬語接頭辞「お・ご」がある。

4．時間接頭辞「現・前・来」がある。

5．対義接頭辞「大・小」・「片・両」がある。

6．意味的に分類できない接頭辞もある。例は「反」・「本」などである。

特に注目しなければならないのは，否定接頭辞である。否定接頭辞は例外なしに接頭形容名詞で，名詞や形容名詞につければ，派生形容名詞を作る。例は「不：ふ・ぶ」・「無：ぶ・む」・「非」・「未」である。さらに，接頭連体詞もある。例は「対・駐・在」であり，それらの接頭辞は派生連体詞を作る。他の接頭辞は派生を起こさない。

接頭辞と接尾辞以外に，「語尾」と「助詞」がある。接頭辞・接尾辞と語尾・助詞の重要な相違は，ある接頭辞とすべての接尾辞は派生を起こし，品詞を変えることができるが，語尾と助詞にはそういう能力がないことである。

語尾は動詞・派生動詞と形容動詞・派生形容動詞にしかつけない。従って，「動詞的語尾」と「形容動詞的語尾」を区別しなければならない。動詞的語尾は14個あり，形容動詞的語尾は5つある。まず，動詞的語尾を紹介する。

動詞は，Vc と一部の Vu には語幹と基本形という異形がある。その理由で，さらに動詞の語幹につける語尾と動詞の基本形につける語尾を区別する。

動詞の語幹につける語尾は，8 つある。それらは［+Ru］・［+Reba］・［+Yoo］・［+E］・［+Yo］・［+Azu］・［+Azaru］・［+Mai］である。語幹につける語尾なので，それらの語尾にはさらに様々な異形がある。［+Ru］は｛現在｝を指し，［+u, +ru, +uru］の異形がある。［+Reba］は｛仮定｝を指し，［+eba, +reba, +ureba］の異形がある。［+Yoo］は｛未来｝を指し，［+oo, +yoo, +iyoo, +oyoo］の異形がある。［+E］と［+Yo］は｛命令｝を指し，［+E］には［+e, +i, +oi］の異形があり，［+Yo］には［+yo, +eyo, +ei］の異形がある。［+Azu］は「打消」の意味で，｛否定分詞｝と呼び，［+zu, +azu, +ozu, +ezu］の異形がある。［+Azaru］も「打消」の意味で，｛否定現在｝と呼び，［+zaru, +azaru, +ozaru, +ezaru］の異形がある。［+Mai］は｛否定未来｝を指し，［+mai, +omai, +imai］の異形があり，助詞「まい」と区別される。図⑬では動詞の語幹につける語尾をまとめ，実際の例も挙げる。

語尾	異形	下位範疇	意味	例
+Ru	-u -ru -uru	Vc,Vu13,Vu2 Vv, Vu3 Vu11/2,Vu3	現在	kak.u, kaki.mas.u, kudasar.u, ik.u tabe.ru, ari.e.ru k.uru, s.uru, ari.uru
+Reba	-eba -reba -ureba	Vc, Vu2 Vv Vu1,Vu3	仮定	kak.eba, kudasar.eba, ik.eba tabe.reba k.ureba, s.ureba, deki.mas.ureba, ari.ureba
+Yoo	-oo -yoo -iyoo -oyoo・	Vc, Vu2 Vv,Vu13,Vu3 Vu2 Vu1	未来	kak.oo, ik.oo tabe.yoo, kaki.mas.yoo, ari.e.yoo s.iyoo k.oyoo
+E	-e -i -oi	Vc,Vu13,Vu22 Vu13, Vu21 Vu1	命令	kak.e, kudasai.mas.e, ik.e irassyai.mas.i, si-nasa.i, k.oi
+Yo	-yo -eyo -ei	Vv Vu12 Vu12		tabe.yo s.eyo s.ei
+Azu	-zu -azu -ozu -ezu	Vv, Vu3 Vc,Vu2 Vu11 Vu12	否定分詞	tabe.zu, ari.e.zu kak.azu, nasar.azu, ik.azu k.ozu s.ezu
+Azaru	+zaru +azaru +ozaru +ezaru	Vv Vc, Vu2 Vu11 Vu12	否定現在	tabe.zaru kak.azaru, ik.azaru k.ozaru s.ezaru
+Mai	+mai +omai +imai	Vv, Vu3 Vu11 Vu11, Vu12	否定未来	tabe.mai, ari.e.mai k.omai k.imai, s.imai

図⑬：日本語動詞の語幹につける語尾

動詞の基本形につける語尾は6つで，[+Te]・[+Ta]・[+Tara (ba)]・[+Tari]・[+Taroo]・[+ro] がある。[+ro] 以外の語尾は，語幹が「r・t・w」に終わる Vc（刈る・勝つ・買う）と Vu2（下さる・行く）につければ，「音便」が発生する。「刈った・勝った・買った」と「下さった・行った」になる。

「ow」に終わる動詞（乞う・問う・憩う）につければ，母音が伸ばされる。「乞うて・問うて・憩うて」となる。「k」に終わる動詞（書く）につければ，語幹の最後の「k」が削除される。「書いて」となる。

一方，「g」に終わる動詞（嗅ぐ）につければ，語幹の最後の「g」が削除されて，有声音なので，語尾の子音は有声音となり，「嗅いで」となる。さらに，「b・m・n」で終わる動詞（呼ぶ・読む・死ぬ）につければ，基本形の最後の「拍」が「ん」となり，語尾の子音は有声音となって，「呼んで・読んで・死んで」となる。

「g」で終わる動詞と「b・m・n」で終わる動詞と語尾の膠着過程が崩れ，屈折過程となる。つまり，動詞の基本形と語尾の間の区切りが明確にできなくなる。

[+ro] 以外の語尾にはすべて，異形が2つある。[+Te] は {分詞} を指し，[+te, +de] の異形がある。[+Ta] は {過去} を指し，[+ta, +da] の異形がある。[+Tara (ba)] は {仮定過去} を指し，[+tara (ba), +dara (ba)] の異形がある。[+Tari] は {例示} を指し，[+tari, +dari] の異形がある。[+Taroo] は {未来過去} を指し，[+taroo, +daroo] の異形がある。図⑭は，基本形につける語尾をまとめた。

語尾	意味	例
+Te	分詞	Vc: kasi.te; kat.te; kai.te; kaide, yonde, sinde Vv: tabe.te; mi.te Vu: ki.te, si.te; nasat.te, it.te
+Ta	過去	Vc: kasi.ta; kat.ta; kai.ta; kaida, yonda, sinda Vv: tabe.ta; mi.ta Vu: ki.ta, si.ta; nasat.ta, it.ta
+Tara (ba)	仮定過去	Vc: kasi.tara; kat.tara; kai.tara; kaidara, yondara, sindara Vv: tabe.tara; mi.tara Vu: ki.tara, si.tara; nasat.tara, it.tara
+Tari	例示	Vc: kasi.tari; kat.tari; kai.tari; kaidari, yondari, sindari Vv: tabe.tari; mi.tari Vu: ki.tari, si.tari; nasat.tari, it.tari
+Taroo	未来過去	Vc: kasi.taroo; kat.taroo; kai.taroo; kaidaroo, yondaroo, sindaroo Vv: tabe.taroo; mi.taroo Vu: ki.taroo, si.taroo; nasat.taroo, it.taroo
+ro	命令	Vv: tabe.ro, mi.ro Vu12: si.ro

図⑭：日本語動詞の基本形につける語尾

図⑬と図⑭で一覧した語尾はどの動詞的な表現にも（接尾動詞を含めて）つけることができるものである。

形容動詞的語尾は5つあり，[+i]・[+ku]・[+kute]・[+kereba]・[+U] を形容動詞的な表現につけることができる。[+U] をつければ，形容動詞の最後の母音によって，発音が変わる。他の語尾には異形はない。[+i] は {現在}，[+ku] は {連用}，[+kute] は {分詞}，[+kereba] は {仮定}，[+U] は {母音交換連用} である。

[+U] を語幹が「a・o」で終わる形容動詞につければ，「oo」となる。語幹が「u」で終わる形容動詞の場合には，「uu」となる。語幹が「i」で終わる形容動詞の場合は，「yuu」となる。語幹が「e」で終わる形容動詞は日本語に存在しない。図⑮は形容動詞的語尾をまとめたものである。

語尾	意味	例
+i	現在	taka.i
+ku	連用	taka.ku
+kute	分詞	taka.kute
+kereba	仮定	taka.kereba
+U	母音交換連用	a: takoo o: osoo u: usuu i: ookyuu

図⑮：日本語形容動詞につける語尾

最後に，「助詞」という接尾辞が残っている。この分類には幾つかの下位範疇がある。用言につければ，助詞は下位範疇を問わず，語尾の後に出なければならない。体言には自由につけることができる。助詞のなかには，「品詞的」助詞がある。

動詞的助詞は「助動詞」と呼び，例は「です」と「だ」である。双方とも動詞であるが，接尾動詞をつけることはできないし，つけられる語尾も限られている。言語学者はそういうケースを「不如の語形」と言う。「です」は「でございます」から派生したもので，「だ」は「である」から派生したものである。「です」は2つの形態素から成り立っており，「=des.u」と書けばよい。一方，「だ」は [=da] と書いてもよいが，実は「=dar.ɯ」となる。助動詞は「=v」で記号化する。形容動詞的助詞も3つある。「らしい」・「べき」・「ごとき」である。「べき」と「ごとき」は古典的な活用形が残っている。これらを「助形容動詞」と名づけ，「=a」で記号化する。助形容動詞にはさらに接尾辞をつけることができる。

名詞的な助詞は8つある。「の」と {限定} を表す「だけ・ばかり・のみ・まで・どころ・ぐらい/くらい・ほど」がある。それらを「助名詞」と呼び，記号は「=n」である。形容名詞的な助詞には「みたい」1つしかない。名称は「助形容動詞」で，記号は「=k」である。

紹介した品詞的な助詞は語彙素の品詞の定義に十分当てはまっているので，特別な名称を与えるべきである。それらの助詞は，品詞性があるから，派生を起こすことができる。図⑯では品詞的な助詞をまとめた。

助動詞	助形容動詞	助名詞	助形容名詞
=des.u =da	=rasi.i =be.ki	=no; =dake, =bakari, =nomi, =made, =dokoro, =gurai/kurai, =hodo	=mitai

図⑯：日本語の品詞的な助詞

残りの助詞の数は大きく，品詞的に助詞にならない。しかし，文法的な意味によって，分類できる。著しい位置にあるのは「格助詞」である。日本語には9つの格助詞があり，「が・を・に・へ・から・より・と・で」及び「の」である。前者は動詞と形容動詞が求められる格を表し，後者は名詞の「所有格」を表す。他の重要な助詞は「焦点助詞」の「は」と「も」である。「終止助詞」も比較的重要な役割を担っている。例えば，「ね・な・よ・さ」と「ぜ・ぞ・わ・や・な・い・え・かしら・っけ・もの・こと」などである。

結論として，日本語の接辞体系を図⑰でまとめる。

	接辞			
	接頭辞	接尾辞		
		接尾辞	助詞	語尾
動詞		ます	です	
形容動詞	不	たい	らしい	
名詞		手	だけ	
形容名詞		的	みたい	
副詞		がち		
連体詞	在	対		
	御		ぜ・を	る・く

図⑰：日本語の接辞体系

5．日本語の「語」と「文節」

上記に紹介した品詞と「接頭辞・接尾辞・語尾」という体系で，日本語の「語」を定義できる。日本語の「語」は，必須の語彙素と（助詞を除いて）任意の接辞から成り立っている。日本語の「語」の形式は次のようになる。

（語）（接頭辞帰－）〔語彙素（－接尾辞帰）帰〕（－語尾）

記号「帰」は「帰納」を表し，接頭辞も接尾辞も2つ以上出てもよいということを意味し

ている。括弧 () は「任意」を表している。語彙素と接尾辞の構造をさらに繰り返してもよい。

(19)　勉強させにくそう　benkyoo+s.ase+niku.soo　N+V-v+A-k

上記の語には，語彙素は2つある。「勉強する」と「にくい」である。「させ」も「そう」も接尾辞であるから，「語彙素＋接尾辞」という構造が繰り返されたということが分かる。しかし，その構造は「帰」で指摘されているので，繰り返さないままで出てくるのが普通のである

しかし，日本語の統語論の対象は「語」ではなく，「文節」であるので，それも定義してみよう。日本語の語の後には助詞が出てこられる。用言的な助詞（助動詞・助形容動詞）もあるので，助詞の後に語尾をつけることができる。

（文節）語（－助詞帰－接尾辞－語尾）帰

接尾辞は助形容動詞にしかつけられない。語の後の構造は繰り返すことができる。下記の例を見てみよう。

(20)　喧嘩らしかったです　kenka=rasi.kat.ta=des.u　N=a-v+f=v+f
(21)　入るべからず　ir.u=be.kar.azu　V+f=a-v+f

上記の例は双方とも動詞的な文節である。

6．まとめ

本稿では日本語の形態論を紹介した。形態論の基本的な概念を導入した後，日本語の品詞を定義した。品詞は7つあり，動詞・形容動詞・名詞・形容名詞・副詞・連体詞・間投詞である。さらに，日本語の接辞体系を紹介した。日本語には，接頭辞・接尾辞・語尾・助詞があり，接尾辞は品詞の定義に当てはまり，派生を起こす。語尾と助詞は派生を起こせないが，接頭形容名詞と接頭連体詞は派生を起こせる。助詞にも幾つかのタイプがあり，品詞の定義に当てはまるのは助動詞・助形容動詞・助名詞・助形容名詞である。残りの重要な助詞は格助詞・焦点助詞・終止助詞である。本稿では，それらの概念を元にして，日本語の語と文節を定義した。

日本語に特性があるとしたら，その特性は形態論的な生産力と柔軟性であると言えよう。西洋言語に適切な概念では，そういう特性は把握できない危険性もあるので，筆者は，日本語の自立性を認め，自立の立場から記述すべきだと考える。明治維新から，多くの日本人の学者がその目標に向かって，日本語について記述してきた。そのうち，松下大三郎（改撰標準日本文法：1930年・標準日本口語法：1930年）・橋本進吉（国語学概論：1932年）・時枝誠

記（国語研究法：1947年・日本文法：1950–4年）らが取り上げるべき学者である。しかし，日本語の仮名だけを利用しながら分析してしまったので，適切な記述を提供できなかったと言える。自分の母語を分析してみるのは，文化的に重要な一歩であるが，遠くから眺めてみると，もっとよく見えて事情が分かることもよくある。

7．参考文献

すべてのデータそして分析方法を Rickmeyer (1995) から取った。Rickmeyer 氏は，特に米国構造主義者 Bloch（1946）から大きな影響を受けた。これらの外国人研究者に加えて，日本人としては，70年代から日本語の形態論について研究している鈴木重幸氏を取り上げるべきであると考える。

Bloch, Bernard (1946) : Studies in Colloquial Japanese : I. Inflection ; II. Syntax ; III. Derivation of Inflected Words. In : *Bernard Bloch on Japanese*. Roy Andrew Miller (編). New Heaven & London. 1970.

Rickmeyer, Jens (1995) : Japanische Morphosyntax [日本語形態統語論]. Heidelberg : Julius Groos Verlag

鈴木重幸（1972）：日本語文法・形態論［教育文庫３］。むぎ書房。

鈴木重幸（1996）：形態論・序説。むぎ書房刊。